

平成 27 年 6 月 14 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520033

研究課題名(和文) 普遍主義と多元主義の相互検討 ショーペンハウアーとニーチェを中心に

研究課題名(英文) Mutual Consideration of Universalism and Pluralism - mainly focusing on Schopenhauer and Nietzsche

研究代表者

竹内 綱史 (Takeuchi, Tsunafumi)

龍谷大学・経営学部・講師

研究者番号：40547014

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、理論哲学・実践哲学・美学の各領域における普遍主義と多元主義とを相互に検討することを目的とした。手引きとしたのは、多元主義的なニーチェ哲学と普遍主義的なショーペンハウアー哲学である。

研究成果は以下の3点である。1. 理論哲学では、現実世界の実際の安定性を理解するうえでは普遍主義を完全に捨てるのは困難であることが確認された。2. 実践哲学では、共同性をどのように評価・理解するかで普遍主義と多元主義が分かれるが、その際、個性の位置づけが最大の焦点となることが明らかとなった。3. 美学では、現実に万人共通の美的享受はあり得ないので、普遍性があり得るのは可能性としてだけであることが確認された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to consider universalism and pluralism mutually in each field of theoretical philosophy, practical philosophy, and aesthetics. We have mainly focused on Nietzsche's pluralistic philosophy and Schopenhauer's universalistic philosophy.

The results of this study are 3 points below. 1. (theoretical philosophy) In order to understand the actual stability of the real world, a certain universalism is indispensable. 2. (practical philosophy) Universalism and pluralism are divided by how to estimate and understand the collectivity, and it is crucial where to place the individuality. 3. (aesthetics) The aesthetic enjoyment common to all people is impossible in fact, so the universality here remain only possibility.

研究分野：宗教哲学

キーワード：多元主義 普遍主義 ニーチェ ショーペンハウアー

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 現代では多くの分野で、ほとんど自明であるかのように、「多様性」が「善いこと」として語られている。哲学や思想においても、「多様性」や「複数性」が礼賛され、多元主義的であることが無条件に素晴らしいと見なされがちである。逆に、普遍主義は端的に「間違い」であるかのような。全体性を語る「形而上学」や、物事の不変の特質を語る「本質主義」は、現代哲学において常に批判の対象となってきた。そうした語りは、ある特定のものの見方を人々に押しつける「暴力」なのではないか、と。例えば、自由・平等・友愛といった近代西欧で生まれた普遍主義的理念は、西欧による帝国主義的支配の道具に過ぎないのではないかと疑われている。

(2) しかし一方で、多元主義はしばしば「相対主義」として批判されてきた。例えば、普遍妥当な真理としての地動説・誰もが善として受け入れるべき人権・誰もが美しいと認めざるを得ないモーツァルトの音楽、といったものがそもそも存在しないならば、この世界はカオスと化してしまうのではないか。普遍妥当性要求を持つ真理や善や美の主張がおしなべて「間違い」だとするなら、われわれは意思疎通も協働も交感もできなくなってしまう。

(3) 以上の問題、つまり真善美を扱う各領域における普遍主義と多元主義の相克が、ニーチェ哲学を一つの震源としていることに、異論は無いだろう。「真理とはある種の生物が生きるために不可欠な誤謬に過ぎない」という有名な遺稿や、「神の死」の宣告とそれにともなう「至高の諸価値の無価値化」というニヒリズム、そして芸術創造を範型としてあらゆる思考を捉えるような「創造者の美学」といった、ニーチェのラディカルな多元主義は、普遍主義陣営からは毛嫌いされる一方で、理論哲学・実践哲学・美学のすべての領域で、多大な影響を及ぼしている。

(4) けれども、ニーチェの多元主義哲学がショーペンハウアーの普遍主義哲学への批判的応答として成立していることは、よく知られてはいるものの、あまり省みられない。ショーペンハウアーはニーチェによって「乗り越えられた」ものとして扱われがちであり、ニーチェを批判する者たちによっても、軽視されてきた。だが、近年のショーペンハウアー研究の進展により、カント的普遍主義の正統的後継者としての側面が見直され、ニーチェらのショーペンハウアー像は一面的過ぎることが明らかとなっている。

(5) 本研究では、以上のような新しい研究動向を踏まえ、普遍主義と多元主義という土俵の上で、ショーペンハウアーとニーチェを

対決させることを試みた。それは現代における普遍主義と多元主義の対立の背景に哲学的問題系を読み取ることであり、同時にまた、ショーペンハウアー哲学やニーチェ哲学の現代的意義を捉え直すことでもある。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、理論哲学・実践哲学・美学の各領域における普遍主義と多元主義とを相互に検討することで、両陣営の問題点を明らかにし、それぞれの領域で新しい視野を切り開くことを目的とした。手引きとしたのは、多元性を自らの哲学的原理にまで高めたニーチェ哲学と、カント的普遍主義の後継者にして常にニーチェの仮想敵であり続けたショーペンハウアー哲学である。

(2) 現代的諸問題の解決策は普遍主義か多元主義かの二者択一で語られることが多いが、多元性無き普遍主義は暴力であり、普遍性無き多元主義はカオスでしかない。本研究は、現代的諸問題のルーツである 19 世紀の哲学へと遡りつつ、この問題に答えようとするものである。

## 3. 研究の方法

(1) 理論哲学を扱う第一部門、実践哲学を扱う第二部門、美学を扱う第三部門、という形で全体を三つの部門に分ける。当然ながら部門横断的な研究も奨励されたが、研究協力者等も含め、各部門を主に担当する 3、4 名をそれぞれ配置し、重点的に研究を進めた。そのほか、当該分野の第一人者に講演等を通じて協力をしていただいた。

### (2) 各部門担当者および役割分担

#### 【第一部門】

齋藤智志 (研究分担者・部門責任者)  
岡村俊史 (研究分担者・資料収集担当)  
本郷朝香 (研究協力者)

#### 【第二部門】

竹内綱史 (研究代表者・部門責任者)  
伊藤貴雄 (研究分担者・資料収集担当)  
上野山晃弘 (研究分担者・HP管理担当)  
鈴木克成 (研究分担者・全体総務)

#### 【第三部門】

関塚正嗣 (研究分担者・部門責任者)  
一郎丸仁美 (研究分担者・資料収集担当)  
高橋陽一郎 (研究分担者・研究会事務)  
山本恵子 (研究協力者)

(3) 2泊3日の研究会を年一回開催した。また、それとは別に、三年次には、全体を総括するためのシンポジウムを開催した。

### 第1回研究会

日程：2012年8月26日～8月28日

場所：諏訪東京理科大学  
 個人発表：  
 竹内綱史「普遍主義と多元主義、あるいは、ショーペンハウアーとニーチェ」  
 五郎丸仁美「ニーチェ哲学における多元主義と美学的思考」  
 本郷朝香「ニーチェの歴史的人間観」  
 研究構想発表：  
 上野山晃弘 / 伊藤貴雄 / 高橋陽一郎 / 齋藤智志 / 岡村俊史 / 山本恵子 / 鈴木克成 / 関塚正嗣  
 テキスト講読：  
 Friedrich Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse: Vorspiel einer Philosophie der Zukunft* (担当：岡村俊史)

第2回研究会  
 日程：2013年8月3日～8月5日  
 場所：青森中央学院大学  
 個人発表：  
 竹内綱史「宗教問題における普遍主義と多元主義」  
 上野山晃弘「ショーペンハウアー倫理学と自然哲学」  
 伊藤貴雄「ショーペンハウアーのコスモポリタニズム」  
 ワークショップ：  
 齋藤智志 / 岡村俊史 / 鈴木克成  
 テキスト講読  
 Friedrich Nietzsche, *Jenseits von Gut und Böse: Vorspiel einer Philosophie der Zukunft* (担当：岡村俊史)  
 Arthur Schopenhauer, *Die Welt als Wille und Vorstellung* (担当：高橋陽一郎)

第3回研究会  
 日程：2014年8月24日～8月26日  
 場所：日本大学文理学部  
 講演：  
 高辻知義「ショーペンハウアー・ワグナー・ニーチェ」  
 ワークショップ：  
 高橋陽一郎「意志と造形藝術 ショーペンハウアーからカンディンスキーへ」  
 山本恵子「ニーチェにおける音楽・建築・言語」  
 個人発表：  
 岡村俊史「価値の転換とパースペクティブの多元性 ニーチェにおける批判の構造」  
 齋藤智志「普遍性と多元性の出会う場所 ショーペンハウアーにおける全体表象とプラトンのイデー」  
 鈴木克成「構成主義的歴史記述の問題と可能性 ニーチェの歴史記述の立場から」  
 関塚正嗣「趣味(判断)と行為」  
 竹内綱史「『悲劇の誕生』における Wahn について」

第4回研究会  
 日程：2015年2月28日～3月2日  
 場所：龍谷大学  
 ワークショップ  
 第一部門総括ワークショップ  
 第二部門総括ワークショップ  
 第三部門総括ワークショップ  
 講演  
 鎌田康男「超越論哲学の継承者としてのショーペンハウアー」  
 須藤訓任「ニーチェの遠近法主義：いま一つの可能性」  
 総括シンポジウム「ショーペンハウアーとニーチェ、あるいは、普遍主義と多元主義」  
 齋藤智志「認識における普遍性と多元性 理性・歴史・パースペクティヴィズム」  
 竹内綱史「実践哲学における普遍主義と多元主義 アイデンティティ・共同体・国家」  
 関塚正嗣「美学における普遍主義と多元主義 アイデア・意志・趣味」

4. 研究成果

(1) 第一部門(理論哲学)

理論哲学におけるショーペンハウアーとニーチェの対比

ニーチェ	ショーペンハウアー
あらゆる理性作用に共通のメルクマールは、ただ「良心」(=真理を求める働き)のみであり、どのような真理を求めるか(何を真理とみなすか)は変化し、求める真理に応じて理性の内実も変化する。	理性とは普遍的表象(概念)を司る能力であり、想像力と協働してイデー(世界の普遍性の担保する機能を有する表象)を形成する。
可変性(多元性)にフォーカス:意志の肯定と表裏一体	安定性(普遍性)にフォーカス:意志の否定(世界の本質の直観)と表裏一体
ニーチェが描くのは、原理的には「安定性」を欠いた世界である。しかし事実としては、世界には強固な安定性が見いだされる。	イデーは強固な安定性を保つが、歴史的生成と文化的差異に開かれている。
・自然主義的	・超越論哲学的
・超越論哲学的な問題の枠組み自体を批判 ・現実の経験(生=権力への意志)について解釈	・経験一般の可能性の条件 ・イデーの歴史的変性・多元性についての解釈学的理解(この部分でのニーチェとの共通性・

	親和性は、従来イメージされていたよりもずっと高い)
・現実性(=権力への意志)こそが唯一の出发点 ・可能性は後から構成される	・(論理的には=超越論哲学の視点からは、) 可能性が現実性に先行
・権力への意志の発現としての哲学的認識 ・哲学的認識もまた生の一部でしかなく、経験一般の可能性の条件を問う超越論哲学のように経験(生)の全体を外部の視点からとらえることは不可能	・経験全体を反省的に眺める観照としての哲学的認識

ニーチェの言う価値評価とは、「特定のタイプの生が世界を経験するための手引きとなる」パースペクティブのことである。しかし、生に何らかの「タイプ」が生じるとき、それが「タイプ」という特定可能なステータスを有する以上、一定程度の安定性を有しているはずであり、そうであればその安定した生のタイプのパースペクティブとそこから経験された世界も一定程度の安定性を有するはずである。そういう世界の住人であるニーチェが「一種のプログラム」(=「一つの試み」、「誘い」)としての多元主義をもって普遍主義に抗するのはなぜか？ その動機(問題意識)は何か？ 多様な意志が肯定される世界観の是認か？ もしそうなら、やはりニーチェとショーペンハウアーとの対立点は、「意志の肯定か、意志の否定か」という問題になる。

なお、ニーチェの多元主義的思想は「一つの試み」、「誘い」であるとされるが、類似の側面はショーペンハウアーにもある。ショーペンハウアーの著作全体を意志の否定への(非規範的な)誘いと見ることができる。その意味でショーペンハウアーの著作は芸術作品と親和性が高い。

## (2) 第二部門(実践哲学)

ショーペンハウアーをベースとする上野山と伊藤の議論からは、多元性に関わった普遍性とその問題点を取り出せる。

上野山の場合は、身体に着目することで、普遍性という一種の「全体主義」に単純に回収されるわけではない個性をショーペンハウアーに見いだした。だが、「共苦」を語る際、やはり普遍性の側面が強調され、個体間での営みに関する議論が薄い。共苦の具体的な場面としての個性性をどう考えるか。

伊藤の場合は、現実の共同体に一定の場所を与える議論をショーペンハウアーの法論として取り出した。「真の共同性」によってチェックを受けながら、現実の共同体のなか

でわれわれは生きるのだ。だが、「共苦」を「共同体を超えた共同性」として解釈するため、「共同体」のネガティブな側面(=必要悪)だけが強調されている。共同体のポジティブな側面をどう考えるか。

ニーチェをベースとする竹内と鈴木の議論からは、普遍性を志向する多元性とその問題点を取り出せる。

竹内の場合は、歴史を背負いつつそのつど当該歴史を相対化し、新たな歴史を立ち上げる共同性に注目する。だが、そこには批判の可能性が見失われかねない危うさがあった。

鈴木の場合は、個の成立と共同性の成立の等根源性が指摘され、それぞれの個体がそれぞれの立ち位置から歴史を立ち上げる多元的な歴史観を提唱する。しかしこの場合、相対主義の危険性を孕むことは否めない。

かくして問題は、ふたたび相対主義を乗り越える「普遍性」という問題に立ち返らざるを得ない。共苦による「真の共同性」という審級が存在するショーペンハウアー的な普遍主義、それ認めずに、相対主義への転落という危険を冒してでも多元化をもくろむニーチェ。さしあたりの結論としては、「普遍主義と多元主義の相互検討」を、継続することなのだろう。

## (3) 第三部門(美学)

ショーペンハウアーは、造形芸術は「アイデアの模写」であり普遍性を持ちうるとする。この普遍性は「アイデア」の普遍性に依っている。ただし、この普遍性は万人にとって現実に享受可能な普遍性ということではない。なぜなら、造形芸術を通じてアイデアの普遍性にまで至るのは少数の者のみであるからである。その意味で、この普遍性は無条件の普遍性ではないということになる。言い換えれば、カンディンスキーの試みに見られるように、造形芸術家の側から「意志」を模倣しようといくら試みても挫折せざるをえないということである。少なくとも「意志」の造形芸術化はショーペンハウアーからは拒否されていると言える。

他方、音楽(非造形芸術)は「意志の模写」であり、この普遍性は「意志」(生への意志)が万人にとって普遍的である限り、つまり意志が世界の本質的原理である限り、「意志」の普遍性に基いている。したがって、その意味で、この普遍性は万人にとっての普遍性であることになる。「意志の模写」としての芸術(音楽)は、まさに「意志の模写」ゆえに普遍性を持つ。ただし、鑑賞者である限りの「万人」にとって普遍に妥当するわけではないであろう。

ニーチェは、「意志」(権力への意志)の発現としての芸術(創造)には普遍性がないと

する。それは、「意志」を、普遍的なものではなく、個別的・多元的なものとして捉えているからである。言い換えれば、芸術（創造）は意志の個別性・多元性に基づく「趣味」に依っているということになる。これは、芸術家についても、鑑賞者についても言える。

ただし、ニーチェの言う「偉大な様式」はある種の普遍性を要求している。しかし、その普遍性は万人にとっての普遍性ではない。なぜなら、「偉大な様式」は最高の権力への意志から創造されるものであり、万人がそのような最高の権力への意志に達することはありえないからである。

ショーペンハウアーにおける造形芸術の条件付き普遍性とニーチェの「偉大な様式」の普遍性を除いて考える限り、美学におけるショーペンハウアーの「普遍主義」とニーチェの「多元主義」の相違は、結局のところ、両者の「意志」概念の相違、すなわち前者の「意志」の一元性（普遍性）と後者の「意志」の多元性（個別性）の相違に由来すると言えよう。

ショーペンハウアーの造形芸術の条件付き普遍性とニーチェの「偉大な様式」の普遍性は、共に「万人にとっての普遍性」でないという点では接近しているように見える。しかし、前者が「イデア」を根拠とし、後者が「最高の権力への意志」を根拠としている点で、本質的に相違していると言えよう。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 25 件）

齋藤智志、普遍性と多元性の出会う場所 ショーペンハウアーにおける全体表象とプラトンのイデア、杏林大学外国語学部紀要、査読有、第 27 号、2015 年、31-43 頁。

五郎丸仁美、ニーチェ哲学における多元主義と美学的思考、多摩美術大学研究紀要、査読有、第 28 号、2014 年、125-138 頁。

高橋陽一郎、ドイツ表現主義と生の哲学（1）ヴォリンガーを巡って、精神科学、査読有、第 52 号、2014 年、167-184 頁。

上野山晃弘、人間と自然 3・11 以後のショーペンハウアー倫理学、ショーペンハウアー研究、査読有、第 18 号、2013 年、43-60 頁。

齋藤智志、『根拠律』はショーペンハウアー研究を更新する、ショーペンハウアー

研究、査読有、第 18 号、2013 年、125-138 頁。

関塚正嗣、『聖なる肯定』とは何か？ 『ツアラトウストラ』の最初の説話「三つの変化について」解釈、東京理科大学紀要（教養編）、査読無、第 45 号、2013 年、19-32 頁。

伊藤貴雄、ショーペンハウアー法哲学の成立史 カント・フィヒテの国家契約論との関係、創価大学人文論集、査読無、第 25 号、2013 年、49-82 頁。

竹内綱史、ニヒリズムと系譜学、Heidegger-Forum、査読無、第 6 号、2012 年、1-13 頁。

伊藤貴雄、ヘーゲルとショーペンハウアー 根拠律の社会哲学、ヘーゲル哲学研究、査読有、第 18 号、2012 年、102-114 頁。

齋藤智志、ポスト・フクシマの世界を生きるとは、何を引き受け、何について考えることなのか？、ショーペンハウアー研究、査読有、第 17 号、2012 年、29-51 頁。

伊藤貴雄、ショーペンハウアー法哲学の成立史 カント・フィヒテの自然法論との関係、東洋哲学研究所紀要、査読無、第 28 号、2012 年、108-134 頁。

五郎丸仁美、ニーチェ哲学における「自由と必然」 中期作品～『ツアラトウストラ』を中心として、人文学研究、査読無、第 43 号、2012 年、77-108 頁。

〔学会発表〕（計 39 件）

伊藤貴雄、ゲーテとその時代 『ファウスト』入門、西田幾多郎哲学講座（招待講演）2014 年 6 月 29 日、石川県西田幾多郎記念館（石川県・かほく市）。

伊藤貴雄、歓喜の歌と永遠平和の精神 ベートーヴェンとカント、西田幾多郎哲学講座（招待講演）2014 年 6 月 28 日、石川県西田幾多郎記念館（石川県・かほく市）。

高橋陽一郎、ショーペンハウアーにおける無根拠としての意志の自存性 シェリングとの関係を中心に、日本ショーペンハウアー協会第 26 回全国大会（シンポジウム提題）2013 年 11 月 30 日、立正大学（東京都・品川区）。

伊藤貴雄、甦るショーペンハウアー 非

戦の哲学、西田幾多郎哲学講座（招待講演）2013年7月27日、石川県西田幾多郎記念館（石川県・かほく市）。

上野山晃弘・本郷朝香、シンポジウム「自然再考」、日本ショーペンハウアー協会第25回全国大会、2012年12月8日、龍谷大学（京都府・京都市）。

本郷朝香・岡村俊史、ワークショップ「『価値』について」、日本ショーペンハウアー協会第17回ニッチェ・セミナー、2012年5月4日、大学セミナーハウス（東京都・八王子市）。

関塚正嗣、「聖なる肯定」とは何か？『ツァラトゥストラ』の最初の説話「三つの変化について」解釈、日本ショーペンハウアー協会第17回ニッチェ・セミナー、2012年5月3日、大学セミナーハウス（東京都・八王子市）。

〔図書〕（計6件）

伊藤貴雄、晃洋書房、ショーペンハウアー 兵役拒否の哲学 戦争・法・国家、2014年、320頁。

本郷朝香ほか、社会評論社、歴史知と近代の光景、2014年、225頁。

鈴木克成ほか、ぎょうせい、点描～変わりゆく現代社会、2014年、226頁。

伊藤貴雄ほか、清水工房出版、地球文明と宗教 東洋哲学研究所創立五十周年記念論文集、2013年、416頁。

竹内綱史ほか、ナカニシヤ出版、エシックス・センス 倫理学の目を開け、2013年、284頁。

高橋陽一郎ほか、北樹出版、美についての五つの考察、2012年、126頁。

〔その他〕

ホームページ等

<http://snkaken.webcrow.jp/>

（「普遍主義と多元主義の相互検討 ショーペンハウアーとニッチェを中心に」研究グループホームページ）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹内 綱史（TAKEUCHI, Tsunafumi）

龍谷大学・経営学部・講師

研究者番号：40547014

(2) 研究分担者

関塚 正嗣（SEKIZUKA, Shoji）  
諏訪東京理科大学・共通教育センター・教授

研究者番号：00350851

上野山 晃弘（UENOYAMA, Akihiro）  
日本大学・文理学部・助教

研究者番号：00440024

岡村 俊史（OKAMURA, Toshifumi）  
大阪市立大学・文学研究科・研究員

研究者番号：20527733

五郎丸 仁美（GOROMARU, Hitomi）  
国際基督教大学・キリスト教と文化研究所・研究員

研究者番号：30568845

鈴木 克成（SUZUKI, Katsunari）  
青森中央学院大学・経営法学部・教授

研究者番号：60279487

伊藤 貴雄（ITO, Takao）  
創価大学・文学部・准教授  
研究者番号：70440237

齋藤 智志（SAITO, Satoshi）  
杏林大学・外国語学部・教授  
研究者番号：70442019

高橋 陽一郎（TAKAHASHI, Yoichiro）  
日本大学・文理学部・准教授  
研究者番号：80333102

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

本郷 朝香（HONGO, Asaka）  
立教大学・非常勤講師

山本 恵子（YAMAMOTO, Keiko）  
東京造形大学・准教授

高辻 知義（TAKATSUJI, Tomoyoshi）  
東京大学・名誉教授

鎌田 康男（KAMATA, Yasuo）  
関西学院大学・総合政策学部・教授

須藤 訓任（SUTO, Norihide）  
大阪大学・大学院文学研究科・教授